

解答

③

傍線部で注目すべきは再読文字の「須」だ。「すべからく」(すべし)と訓み、「くする必要がある」(くしなければならぬ)の意となる。この時点で選択肢は早くも③と⑥に絞られる。さて、両者の違いは、「皆」を④「その言をして皆」と副詞でとるか、⑥「その言の皆をして」と名詞でとるかという点である。しかし、漢文の構造として用言(「若出」)の上にくるのは副詞なので、正解は③と判定できる。

その他の選択肢は、①・④「まさに」(すべし)は「当」(応)・②・⑤「よろしく」(すべし)は「宜」の訓みである。

また、解答には絡まないが句法を確認しておく。「使A B」が使役形で「AをしてB(せ)しむ」「若」は前講にも出てきた比況形で「AはBのごとし」である。「其の言」「非」「出於吾之口」の関係を押さえよう。もう一つ、置き字の「於」は、ここでは動作の起点(より)を示す。

これらを踏まえて直訳すれば、「書(四書五経)を読み考察するときには、熟読してそこに書かれている言葉をすべて自分の口から出たようにさせる必要がある」となる。自分で言っているかのようになるまで熟読し、自分の言葉としなさい、ということである。

選択肢チェック

問 傍線部A「先^{再読文字}須^{すべからく}熟^す読^{べし}、使^{使役}其言皆若^{動作の起点を示す}出^於吾之口。」の書き下し文として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。

- ① まづまさに熟読し、その言をして皆吾の口より出づるがごとからしむべし。
- ② まづよろしく熟読し、その言の皆をして吾の口に出づるがごとからしむべし。
- ③ まづすべからく熟読し、その言をして皆^{副詞}吾の口より出づるがごとからしむべし。
- ④ まづまさに熟読し、その言の皆をして吾の口に出づるがごとからしむべし。
- ⑤ まづよろしく熟読し、その言をして皆吾の口より出づるがごとからしむべし。
- ⑥ まづすべからく熟読し、その言の皆をして吾の口に出づるがごとからしむべし。

「皆」は副詞だから
このような訓み方はしない

書き下し文

大抵書を観るには、先づ須らく熟読し、その言をして皆吾の口に出づるがことからしむべし。繼ぐに精思を以てし、其の意をして皆吾の心に出づることからしむ。然る後以て得ること有るべきのみ。文義に疑ひ有りて、衆説紛錯するに至りては、則ち亦虚心静慮して、遽に其の間に取捨する勿かれ。

現代語訳

おおよそ四書五経を精読するには、第一にその言葉が全て自分の口から出たものようになるまで熟読しなければならぬ。次にくわしく考え、その意味が全て自分の心から出たものようにする。そうして初めてその道理を理解することができる。文意に疑問があり、多くの説が入り乱れているときは、先入観を捨てた心で静かに思索するのがよく、性急にいずれかの説に決めつけたりしてはいけない。

重要語句

□ 勿 返読文字で「〜(する)なかれ」と訓む。禁止(〜するな)の意。

解答

②

再読文字の「未」がポイントだ。「未」は「いまだ〜(せ)ず」と訓み、「まだ〜しない」の意味。傍線部を直訳すれば、「まだ死んでいない者もまた鬼(死者)である」となる。どういうことか、本文の文脈を追っていこう。

文末の「何異」が、「〜ンヤ」と送り仮名をしているので、反語であることに注意しよう(↓第18講参照)。「飲み食いに明け暮れ、酔ったり夢見たりするのみで、ひとかたまりの土くれのような者は、生きているといっても、すでに死んでしまった鬼と何が異なろうか(いや何も異ならない)」ということである。

これを踏まえて傍線部を含む一文を解釈すれば、「死んでいるも同然の人間がいることに、世の人は気づいていない」となる。よって、「死者同様の者がいる」とある②が正解と判定できる。①は「生死の間の境界を越えて」、③は「生きていても死んでいても」、④は「永遠に死滅しない」、⑤は「死者の亡霊にとりつかれてしまう」が、いずれも「未死」に合致しない。

選択肢チェック

再読文字「いまだ〜(せ)ず」

問 傍線部A「未」死者亦鬼」の説明として最も適当なものを、次

の①〜⑤のうちから一つ選べ。

- ① 生死の間の境界を越えて宿る魂のあること。
- ② 生きている者の中にも死者同様の者がいること。
- ③ 生きていても死んでいても、酒と夢にひたる者がいること。
- ④ 美しい陶酔と夢想にひたり、永遠に死滅しない魂のあること。
- ⑤ まだ死なないうちから、死者の亡霊にとりつかれてしまう者のいること。

傍線部の後で、飲み食いするだけの土くれのような人間は、死者と何も変わらない(与已死之鬼何異)と述べられている

書き下し文

人の斯の世に生まるるや、但だ已に死せる者を以て鬼と為すを知るのみにて、未だ死せざる者も亦鬼なるを知らざるなり。酒甕飯囊の、或いは酔ひ或いは夢み、塊然たる泥土のごとき者は、則ち其の人生けりと雖も、已に死せるの鬼と何ぞ異ならんや。

現代語訳

人がこの世に生まれたときには、すでに死んだ者を死者とみなすことを知っているだけで、まだ死んでいない者が死者であることもあるということを知らない。酒のかめや飯の袋のように、酔ったり夢見たりするだけで、ひとかたまりの土くれ同然の者は、生きていっているといっても、すでに死んでいる人間とどこも異ならない。

重要語句

- 但 「唯」「惟」などと同じく「ただ」のみ」と訓む。限定形で「↓だけ」の意。(↓第22講参照)
- 以A為B 「AをもってBとなす」と訓む。「AをBとみなす」の意。

解答

④

傍線部でまず注目されるのが再読文字の「当」だ。「まこと(す)べし」と訓み、「当然(すべきた)の意味である。選択肢を見ると、①・③・⑤は「当たる」と動詞として訓んでいるが、何が「当たる」のか、対象が示されていないので無理がある。

そして、傍線部でもう一つ注目してほしいのが返読文字の「若」だ。第3講で見たとおり、「若」は「A・B」の関係を示す。傍線部では、副詞の「固(固より)」と再読文字の「当」を挟んで、「為獄(是)」であると捉えられる。残る選択肢の中で、そのように訓んでいるのは④「獄を為むること(若く)は是くの若く」しかない。よって④が正解と判定できる。

「為」は、名詞で「ため」と訓むだけでなく、動詞では「なす」「なる」「おさめる」、助動詞では「たり(断定)・る・らる」(受身)と訓み、文脈から判断しようとする誤るおそれがある。そういうときこそ、**返読文字・再読文字や句法が示す文構造に注目しよう**。意味は取り違えても、文構造という〈形〉は取り違えることはない。

選択肢チェック

問

傍線部A「為獄固**当**若是」の返り点の付け方とその読み方として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。

再読文字「まさに(す)べし」

☆意味よりも、
句法などが示す
文構造から正誤を
判断しよう！

「当」を再読文字として訓んでいない

- ① 為_レ獄 固 当_一 若_レ 是_一
獄の固より**当たるが為**に是くの若しと
- ② 為_レ獄 固 当_レ 若_レ 是_一
獄の固より**当**に是くの若くなるべきが**為**なりと
- ③ 為_二獄 固 当_レ 若_レ 是_一
獄の固より**是**くの若く**当**たるを**為**むと
- ④ 為_レ獄 固 当_レ 若_レ 是_一
獄を**為**むること**固より当**に**是**くの若くなるべしと
- ⑤ 為_レ獄 固 当_一 若_レ 是_一
獄を**為**めて**固より当**たることは**是**くの若しと
- ⑥ 為_レ獄 固 当_レ 若_レ 是_一
獄の**為**に**固より当**に**是**くの若く**すべし**と

A 為獄

≡ 若

B 是

の関係を
押さえて

④のみ
訓んでいるのは

書き下し文

唐臨大理卿と為り、初めて職に蒞み、一死囚を断ず。先時死に坐する者十余、皆他官の断する所なり。会太宗寺に幸し、親ら囚徒を録す。他官の断する所の死囚は、冤と称して已まず。臨の断ずる所の者は、黙して言ふこと無し。太宗之を怪しみ、其の故を問ふ。囚対へて曰はく、「唐卿の臣を断ずるや、必ず枉濫無からん。意を断つ所以なり」と。太宗歎息すること之を久しくして曰はく、「獄を為むること固より当に是くのごとくなるべし」と。囚遂に原さる。即日、御史大夫に拝せらる。

現代語訳

唐臨が大理卿となって、職につきはじめのころ、ある一人の囚人に死刑の判決を下した。それより前に死刑と判決された者は十余人いたが、みな他の官吏が断じたものであった。たまたま太宗が大理寺に行幸になり、裁判に誤りがないから再点検された。他の官吏が裁いた死刑囚たちは、冤罪だと称してやまなかった。だが、唐臨が裁いた死刑囚は黙って何も言わなかった。太宗は不審に思い、その訳をお聞きになった。囚人が答えて言うには、「唐卿殿が私らを裁くにあたっては、法をまげて罪におとしいれることなど絶対にございませぬ。それが死刑判決を素直に受け入れた理由です」と。太宗が長いため息をついて言うには、「裁きとはまさにこのようにあるべきだ」と。結局、囚人は罪を赦された。そして、その日のうちに唐臨は御史大夫の拜命を受けたのである。

重要語句

- 会 副詞では「たまたま」と訓む。「偶然」の意。
- 見 「る・らる」と訓む。受身形で「くされる」の意。

解答

⑤

まず、再読文字の「將」に注目すると、「まさに〜(せ)んとす」と訓むから、文末を「べし」としている②と③は消去できる。ここまではスンナリと行っただろう。問題はその後どうやって正解までたどり着くかである。

そこで、傍線部の2行前にある「下有受其害者矣」の句に注目しよう。この句は傍線部と対にならざる。

下 有 受 其 害 者 矣
 ⇔
 下 將 有 被 其 患 者 矣

「被」に対応するのは動詞の「受」である。よって④のように「被」を受身の助動詞(る)として訓むのは無理だろう。また、「受」は「受く(受くる)」と訓んでいるので、この訓みに対応する「被」の訓みは? と考えれば、①の「おほふ」よりも⑤の「かうむる」の方が適当だ。よって、⑤が正解と判定できる。

上の者が艱難を十分に知らずにみだりに施策を行えば、下の民はその害を受けることになる。それに対して、艱難を十分に知ってから施策を行えば、下の者は恩恵を受けることになる、ということである。

続く第8講・第9講では対句に着目して解く問題を扱う。対句とは、意味的・構造的に対応する2つの句を並べることだ。本問でも、2つの句は離れているが、構造的に再読文字・述語(動詞)・客語(名詞)が同じ位置にあり、意味的にも「害」と「恵」が対になっている。

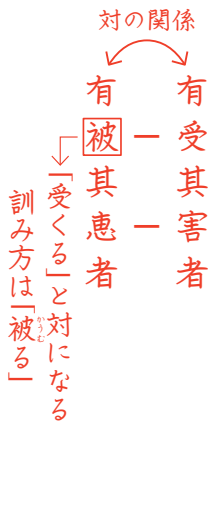
共通テストに限らず、国公立二次・私立大においても、対句が解答に絡む問題は非常に多い。対句の関係にある句はないかという視点で、傍線部の前後を見てほしい。

選択肢チエック

問

傍線部A「下^{再読文字}將^下有^被其^上恵^者者^上矣」の読み方として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① しもまさにそのめぐみをおほふものあらんとす
- ② くだらばまさにそのめぐみをかうむるものあるべし
- ③ しもまさにそのめぐみをおほふものあるべし
- ④ くだらばまさにそれめぐまるものあらんとす
- ⑤ しもまさにそのめぐみをかうむるものあらんとす



書き下し文

蓋し人の上に居るは甚だ難し。苟くも艱難を諳知せず、遽かに授くるに権を以てすれば、妄意に設施して、下其の害を受くる者有り。此れ造物の必ず先に困苦せしむる所以なり。艱難を諳知して、然る後に之に授くるに権を以てすれば、則ち其の他日の設施、下將に其の恵みを被る者有らんとす。故に造物の先に其の人を困苦せしむるは、独り孟子の其の能はざる所を増益するの説のごときのみならずして、凡そ以て他日其の人の下に在る者の利の為にするなり。

現代語訳

思うに人の上に立つというのは難しい。もし艱難を十分に知らぬまま急に権力を授けたとしたなら、みだりに施策を行って下の者はその害を受けることになる。こういう理由で造物主は必ず先に困苦させるのである。艱難を十分に知ってから権力を授けるならば、他日の施策によって下の者はその恩恵を受けることになる。だから、造物主が将来人の上に立つべき人に対して先に困苦させるというのは、孟子の説のようにその能力を増進させるといっただけではなく、他日にその人の下にいることになる者の利益のためでもあるのである。

重要語句

- 蓋 主に文頭にくる場合、副詞で「けだし」と訓む。「思うに」の意。
- 苟 「いやしくも」(せ)「ば」と訓む。仮定形で「もしば」の意。(↓第21講参照)
- 非独 「ひとり」のみにあらず」と訓む。累加形で「ただけではなく」の意。(↓第24講参照)